

新しい自分に出会う**探究学習**

「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」（以下、総合探究）へと変わり、「古典探究」や「地理探究」など、教科においても「探究」が名称に含まれる科目が複数新設されたことが象徴するように、実施2年目となる新学習指導要領では、探究的な学習活動（以下、探究学習）の充実が求められています。中でも総合探究などで行われるような探究学習は、“生徒主体”の学習活動などと言われますが、生徒主体と言っても、教師がその学習に何もかわらないということではありません。では、“生徒主体”の探究学習とはどういった学習なのか、教師はそれにどうかかわるべきなのかと問われた時、教師間で共通認識が図れている学校はまだ多くはないようです。今回私は、2つの学校から、社会人の1人として、生徒が探究学習に取り組む場に立ち会う機会をいただきました。生徒たちとやり取りを重ねる中で、探究学習が、彼ら、彼女たちにとって、今までの自分を変える、新しい自分に出会う、そうした学びになっていると感じました。本特集は、その2校の探究学習を取材した記事を中心に、主体的に探究学習に取り組む生徒の姿や生徒にかかわる教師の考え、それに基づくアクションが、読者の先生方に具体的かつリアルに伝わることを目指しました。ぜひ、ご覧ください。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

課題整理

- P.4 改めて考える、「探究学習」とはどのような学びか。それを実現する上での課題は

実践レポート

- P.6 学校現場編 ● **岩手県立遠野高校**
とのお
 答えが1つではない問いに、グループでどのように向き合うか
- P.10 学校現場編 ● **長崎県・私立純心中学校・純心女子高校**
 主体的に学ぶ授業とは？ 生徒と教師が新しい授業を追究
- P.14 教育委員会編 ● **青森県教育庁**
 1人1課題に取り組む「あおもり創造学」で、地域課題を自分事として捉える
- P.17 教育委員会編 ● **福井県教育庁**
おも
 生徒が「念い」を社会に発信する、全国規模の「プレゼン甲子園」を開催

本特集テーマのnext

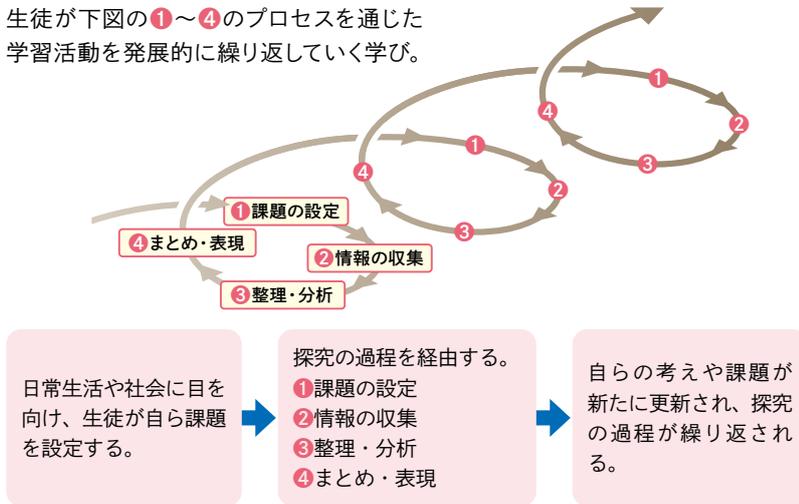
- P.20 探究のプロセスを見通しつつ、論理的・批判的に思考することができる
 「対話型論証モデル」で、探究の自走を図る
 京都大学大学院教育学研究科 教授 松下佳代 / 大阪府・私立高槻中学校・高校 教頭 前田秀樹
 大阪府・私立高槻中学校・高校 ティーチング・アシスタント、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 田中孝平

改めて考える、「探究学習」とはどのような学びか。 それを実現する上での課題は

高校で新学習指導要領が実施されて1年が経った。探究学習に取り組む「総合的な探究の時間」については、授業をどのように進めればよいのか、教師は生徒にどうかかわればよいのか、学校現場からは、依然戸惑いの声が聞かれる。そこでは、改めて、探究学習とはどのような学びなのかについて考え、それを実現する上での課題を整理する。

1 探究における生徒の学習の姿

生徒が下図の①～④のプロセスを通じた学習活動を発展的に繰り返していく学び。



※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

2 探究に欠かせない生徒の主体性

探究では、生徒が、身近な人々や社会、自然に興味・関心を持ち、それらに意欲的に関わろうとする主体的、協働的な態度が欠かせない。探究に主体的に取り組むというのは、自らが設定した課題の解決に向けて真剣に本気になって学習活動に取り組むことを意味している。それは、解決のために、見通しをもって、自ら計画を立てて学習に向かう姿でもある。

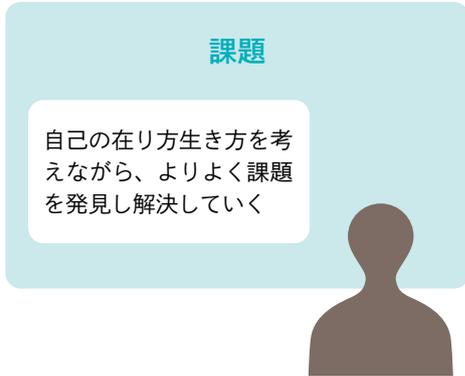
※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

2022年度から実施されている高校の新学習指導要領では、探究的な学習活動（以下、探究学習）の充実が求められている。改めて、「探究」とはどのような営みなのか。文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」では、「探究」とは、「問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」ことであり、「物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営み」と定義している。

そして、「探究における生徒の学習の姿」として、探究のプロセスも提示され(①)、実生活や実社会の課題について、生徒が探究のプロセスを通して考え、判断し、表現することが大切だと指摘している。さらに、「探究」において欠かせないものの1つとして、「生徒の主体性」を挙げ(②)、生徒主体の探究学習が実現されている状態の1つが、生徒の設定する課題が「自分にとって関わりが深い課題(自己課題)」

4 課題と生徒との関係（イメージ）

自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決していく



※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

3 生徒の主体性を引き出す「自己課題」

高等学校においてこのような生徒の姿を実現していくに当たっては、生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものであることが求められる。質の高い探究とは、次の二つで考えることができる。（中略）もう一つは、探究が自律的に行われるということである。具体的には、
 ①自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）、
 ②探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）、
 ③得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）などの姿で捉えることができる。

※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

5 生徒主体の探究学習を実現する上での課題

- 探究そのものの理解が進んでいない。まだ言葉が独り歩きしていると感じる。
- 「探究」という言葉が難しく、生徒にどの程度「探究」させればよいか分からない。
- 全教員で共通認識を持って取り組むことが難しい。
- 生徒が探究学習の計画を立てる必要性は分かるが、その指導の仕方が分からない。
- 今行っている探究学習の方法が正しいかどうか、迷っている教師は多いと思う。
- とにかく実践し、そこで浮かび上がった課題を次に改善すると

- いった方法でしか、探究学習の指導の進め方が分からない。
- 生徒がどうすれば自己課題を設定できるのかが難しい。いろいろな支援をしているが、うまくいっていない。教師の働きかけによって課題を見つけることができた生徒の事例を知りたい。
- 探究学習は、教師でも想定しない事態が起こり得る。指導にあたっての教師の心構えや、最小限の必要な準備、教師間での意識・ノウハウの共有方法など、実践を知りたい。
- 探究学習が、単なる調べ学習になったり、安易なグループ学習に終わったりする可能性がある。どうすれば探究が深まり、生徒にとって意味を持つ学びになるのか、つかみきれていない。

※『VIEW next』高校版読者モニターへのアンケート結果（2023年2月にウェブとファクスで実施。有効回答数は118）、次年度誌面に関する読者アンケート結果（2022年10月にウェブとファクスで実施、有効回答数は1,380）を基に編集部で作成。

になっていることであると説明している(3)。それは、「総合的な探究の時間」などで行われる探究学習が、「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し解決していくような学び」であるとも言えるだろう(4)。

そうした生徒主体の探究学習が求められる中で、学校現場は様々な課題を抱えている(5)。

『VIEW next』高校版の読者モニターに実施したアンケートなどからは、探究学習がどのような学びかを捉えきれず、教師として生徒にどうかかわればよいのかが分からない様子がうかがえる。

以上のように、探究学習がどのような学びか定義され、それを推進する上での留意点が示されていても、学校現場においてその理解や教師間の共通認識が深まっていないのは、探究学習という学びや、それに取り組む生徒のあるべき姿、そして教師のかかわり方が、具体的にイメージしづらいからではないだろうか。

そこで今号は、帰納的にアプローチすべく、生徒が主体的に探究学習に取り組むとともに、教師が試行錯誤しながら彼ら・彼女たちを支援する2校の事例を紹介する。また、各校が生徒主体の探究学習を推進できるよう、県を挙げて学校現場を支援する動きが増えてきている。その事例として、青森県教育庁と福井県教育庁の取り組みを紹介する。



岩手県立遠野高校

答えが1つではない問いに、グループでどのように向き合うか

生徒が設定した課題

「中学生の数学力の向上のためのアクション」

自分を変えるチャンス！ 岩手県立遠野

高校の2022年度の「総合的な探究の時間」で、「教育から地域課題へアプローチ フェーズ2」への参加を決めた佐藤千星さんは、並々ならぬ決意だった。1年次の「総合的な探究の時間」は、周囲の流れに身を任せてしまい、主体的に取り組むことができなかったからだ。

「活動が終わった時、この1年間は何だったのかと後悔しました。また同じ思いを味わうのは嫌だ。もっと自分で動くこうと思えました」

佐藤さんが選択したゼミのミッションは、「中学生の数学力の向上」。岩手県では、全国学力学習状況調査の数学の正答率が、中学生になると急激に下がっていた。その状況に対して、高

校生としてできることを考え、実際に行動してみようと、数学科の担当の佐藤紘大先生がゼミを立ち上げた。ゼミの活動計画書には、「本気で探究活動に取り組みたい人、自分を変える一歩を踏み出したい人を募集」とあった。自分を変えたいと思っていた佐藤さんにとって、最適なゼミだった。

6月の活動スタート時には、15人の生徒が集まった。佐藤さん同様、自分を変えたいという思いで同ゼミを選んだ浅沼大和さんは、活動開始直後から積極的に行動した。

「数学力の向上について自由にアイデアを出す場面では、勇気を出して自分から発言をしました。失敗を恐れずに行動する心地よさを、初

始直後から積極的に行動した。

お話を伺った生徒の皆さん



佐藤千星さん (2年生)



佐々木 緑登さん (2年生)



浅沼大和さん (2年生)



留場紗叶さん (2年生)



山口晴大さん (2年生)



高田耀莉さん (2年生)

遠野高校の探究学習

「新しい『遠野物語』を創るプロジェクト」と名づけられた「総合的な探究の時間」の中で実施。遠野市役所や企業、大学などの支援を受け、地域遺産のデジタルアーカイブ化、空き家の利活用、地域の食生活の改善など、12のゼミを開講。生徒は自分の興味・関心に基いてゼミを選択する。佐藤紘大先生が主催するゼミ「教育から地域課題へアプローチ」は、21年度に続いて2度目の開催。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

めて味わえた気がしました」

ゼミの活動で決まっていたことは、1月に数学力の向上のためのアクションを起こすことだけ。それまでの間にどのような活動をするのかは、話し合っただけのことになった。活動を円滑に進めるため、メンバーの活動をサポートしたり、悩みを聞いたりする「監督」を置くことも決定。自分を変えるために責任ある立場を担おうと考えた佐藤さん、浅沼さんを始め、5人が監督を務めることになった。また、担当の佐藤先生と親交のあったVIEWnext編集部統括責任者の柏木崇を社会人アドバイザーとして迎えることも決まった。

中学生の数学力が低下している原因を

探ろうと、生徒はグループに分かれて、中学校の教師や中学生への聞き取り、学力や学習意欲に関する調査研究データの収集を開始した。しかし、活動はすぐに停滞した。グループ内でのコミュニケーションが円滑に進まなかったのだ。生徒は週2コマの授業時間以外にも、放課後の時間やSNSを利用して話し合いを行ったが、思ったように意思疎通が図れなかった。

「書籍やウェブサイトで情報を集めている時は、誰よりもよい提案をしようという気持ちで前向きに取り組んでいました。でも、ほかのメンバーと数学力の向上のための具体的な方策を話し合う段階になると、自分の考えをうまく伝えられなかったですし、メンバーの意見もうまく

引き出せませんでした。自分は全然駄目だと、すごく落ち込みました」（浅沼さん）

「意見を言っただけという気持ちで先走って、SNSにきつい口調で書き込んでしまったこともありました。状況は変わりませんでした。声のかけ方が下手すぎると、自己嫌悪に陥り、監督をやめたいと思いました」（佐藤さん）

部活動を優先し、放課後やオンラインでの

打ち合わせに欠席する生徒も出てきた。監督の1人、佐々木緑登さんは、そうした状況を打開しようとして、全員に昼休みに集まってもらい、「ゼミの活動に力を入れよう」と呼びかけた。だが、それもすぐにはうまくいかなかった。

「『一緒にやろう！』と声をかけている最中に、なぜか、自分の言葉がみんなに届いていないことが分かりました。実際、その後のSNSでの返信率も上がらず、どうすればよいのかと途方に暮れました」

全員の熱量が高まる転機は10月に訪れた。

佐藤先生は、社会人アドバイザーと相談し、取り組みを加速させる機会として、オンラインでの「企画プレゼンテーション」を実施することに決めた。監督の1人、留場紗叶さんは、高校生とは全く違う視点からのアドバイスに耳を傾けながら、自分たちの考えがどんどん深まっていく気がしてワクワクした。

「自分たちの考えを否定することなく聞いてもらえて、これからするべきことを一緒に整理

図 佐藤千星さんの活動に対する主体性の変化



してもらえた気がしました。企画プレゼンテーションの翌日、すぐに担当の佐藤先生に、『とてもよい時間でした!』と報告に行きました」

野球部の顧問に相談し、練習と折り合いをつけてプレゼンに参加した山口晴大さんにとっても、社会人のアドバイ스는発見の連続だった。

「考えが甘いところをたくさん指摘されましたが、『こんなふうに考えるのか!』と驚くばかりでした。1時間以上議論したので、とても疲れましたが、一気に前進した気がしました」

「一緒にやろう!」という呼びかけはすぐに届かなかったが、「昼休みにみんなが集まって、ゼミについて気軽に話そう」という佐々木さんのアイデアは奏功した。

「SNSでは議論が進まなかったのに、毎日短時間でも対面で話すようになったところ、いろいろなことが決まっていきました。もともと早くから、気軽に話し合える場をつくれればよかったと思います」(監督の1人、高田耀莉さん)

11月、各グループからの企画の最終提案を経て、ゼミのアクションとして決まったのが、地元の中学生を招いて、様々な数学の問題に挑戦してもらおうイベント「数学を楽しもう・深めよう」だ。遠野市役所と連携した中学校へのPR、数学の問題の精選など、するべきことが具体化すると、生徒の活動はさらに加速した。1月末のイベント当日は29人の中学生が参加。そして2月、全校生徒に対して行われたゼミの成果発表後の

アンケートでは、「自分にとって学びや気づきがあったゼミ」、「発表を通じて最も感動したゼミ」で、いずれも佐藤先生のゼミが1位を獲得した。

生徒の中には悔いも残った。

「最終的に私は、自分たちのグループの企画よりも、ほかのグループの企画の方がゴールと手法が明確だと思い、そのグループに合流しました。でも、そのグループの人たちに遠慮して、主体的に動けなくなり、去年までの自分に少し戻ってしまった気がしました」(佐藤さん)

一方で佐藤さんは、自分の変化や成長も感じ取っている。

「ゼミの活動を通じて、自分にはなかった視点にたくさん気づけました。問題の解決に向けて複数の視点があるということは、1つの方法が駄目でも、別の方法で試せるということです。私は将来は教師になりたいと思っていますが、生徒が困難にぶつかった時、いろいろな視点で継続的に支援できる教師になろうと、今回の経験を通じて自分の将来像が明確になりました」

2月末、職員室にいた佐藤先生を浅沼さんと佐々木さんが訪ね、「来年度も、中学生の数学力の向上のためのアクションを考えたい」と申し出た。浅沼さんは佐藤先生にこう言った。

「つらいことや苦しいことがたくさんあった探究学習だったけれど、根拠を明確にすること、対話して考えることの大切さを学びました。そのすべてが僕の財産です」

図 高田耀莉さんの活動に対する主体性の変化



●学校概要

設立 1901(明治34)年
形態 全日制/普通科/共生
生徒数 1学年約100人
2022年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、室蘭工業大、弘前大、岩手大、山形大、茨城大、釧路公立大、岩手県立大、横浜市立大などに17人が合格。私立大は、岩手医科大、富士大、盛岡大、東北学院大、東北芸術工科大、獨協大、国士館大などに延べ53人が合格。

担当教師と考える「探究学習における主体性」



岩手県立遠野高校
2学年担任
佐藤 紘大 さとう・こうだい
教師歴 10年。同校に赴任して5年目。数学科。



VIEW next編集部 統括責任者
柏木 崇 かしわぎ・たかし

探究学習のプロセスの中で、
様々な生徒が入れ替わるように活躍

柏木 前半の活動では、主体的に動けないメンバーを、監督の生徒たちが引っ張ろうとしましたが、なかなかうまくいきませんでした。監督の1人である佐々木さんは、「後になって考えると、引っ張ろうとするのではなく、任せようとする態度でみんなに接した方がよかったかもしれない」と、私に話してくれましたが、一人ひとりが主体性と協働性を発揮する集団づくりの難しさを、私もひしひしと感じました。ただ、前半の活動で活躍したのは、熱量が高まりきれない生徒を引っ張ろうと苦労した監督たちであったことは確かです。そして、後半の活動で活躍したのは、前半は部活動優先であまり動けなかった生徒たちでした。

佐藤 前半と後半で活躍する生徒が交替したのは、本ゼミの大きな特徴だったと思います。前半、ゼミをどの方向に進めればよいのか全く見えない中で、勇気を持ってみんなを導こうとした生徒、企画が具体化してからイベント当日までの活動を牽引した生徒、イベント後の校内の成果発表で力を発揮した生徒と、様々な生徒が入れ替わるように活躍しました。私は、成長する組織は、きっと本ゼミのように、いろいろな人が自分の長所や強みを生かして、互いに助け、助けられる組織なのだと思います。生徒にとって本ゼミは、社会の縮図のような場だったのではないのでしょうか。

柏木 「中学生の数学力の向上」という、考えられる方策が1つではない課題に対して、情報の収集、整理・分析、具体的なアクションの企画・実行、そしてまとめ・振り返りと、多様なプロセスを経験する探究学習だから

こそ、様々な生徒が入れ替わるように活躍できたのかもしれない。

ただ寄り添うだけではなく、
気づきの機会を与える

佐藤 私たち教師には、探究学習のプロセスの中でヒーローやヒロインが交替するチャンスをつくるのが求められると思います。探究学習における教師のあり方として、「伴走」という言葉がよく使われます。私にとって、これまでの伴走は、思い思いの方向にそれぞれのペースで進んでいく生徒を見守り、求められた時に助言などを行うというものでした。しかし、今回のゼミの活動を通して、探究学習における教師の伴走とは、生徒が活動の中で学びや気づきと出合えたり、自分の考えを整理し、意思決定したりする機会を意図的につくることだと考えるようになりました。その象徴的な例が、柏木さんにも協力してもらった社会人アドバイザーによる企画書の添削です。

柏木 企画書の添削では、私を始めとする社会人との対話を通して、自分の考えを整理したことで、その後の活動に没頭できた生徒がたくさんいました。

佐藤 社会人アドバイザーと対話する中で、生徒は自分たちに足りないものが分かり、今後の活動の見通しを立てることができたのだと思います。企画書の添削を経て、ほかのグループの企画に参画した生徒もいましたが、それも立派な意思決定だと思います。活躍する生徒を教師が入れ替えるのではなく、生徒自らが新しいヒーロー、ヒロインとして立ち上がるきっかけをいかに作るか……。私にとって、これからの探究学習を考える重要な問いが見つかりました。

柏木 活躍する生徒が入れ替われれば、当然、活動が停滞、失速する生徒も現れます。最終的にほかのグループに合流した佐藤さんは、元のメンバーに遠慮して、主体的に活動できなくなったと振り返っていました。

佐藤 佐藤さんと浅沼さんは、「自分たちが経験した停滞や苦しみは、意味があるものだと思う」と私に話してくれました。探究学習で変わりたい、成長したいと考えた2人の願いは、見事に実現しました。

柏木 悩み、苦しんだ探究学習での経験は、それぞれの生徒の人生で価値あるものとして輝くはずですよ。

遠野高校の佐藤紘大先生と純心女子高校の榎本六秀先生が、生徒主体の探究学習をテーマに語り合いました。その模様を取材したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください(右記の2次元コードを読み込み、またはクリックしてアクセス)。VIEWnext ONLINE ▶





長崎県・私立純心中学校・純心女子高校

主体的に学ぶ授業とは？

生徒と教師が新しい授業を追究

生徒が設定した課題

「先生と生徒の対話による新しい授業」

2021年秋、純心女子高校の2年生（当時）の深堀純香さん、白濱桃香さん、橋本由布子さんの3人が、探究学習のテーマとして「主体的な学び」に関心を持ったのは、自由教育に取り組み、ある私立の小・中学校の校長に話を聞いたことがきっかけだった。

「先生と児童・生徒が話し合って学習内容を決めているその学校では、生徒はとても主体的に学習に取り組んでいると聞きました。私たちは、授業で先生の話聞き、先生の板書をノートに写し、先生から与えられた課題をこなすのが学習だと思っていました。それは主体的な学びなのだろうか、主体的な学びとはどのようなものなのだろうかと考えたのです」（深堀さん）

3人の心の中には、探究学習を担当する榎本六秀先生にかけられた、「調べ学習で終わらせず、分かったことを基に、何か行動を起こしてほしい」という言葉があった。自分たちが選んだ「教育」という領域は、高校生が当事者として行動を起こしやすものだ。3人は、「先生と生徒の対話による新しい授業」を課題として設定し、様々な教育実践の研究と並行して、自分たちの授業を変えるための行動を始めた。

新しい授業を考えるにあたってヒントにしたのが、榎本先生の化学の授業だ。先生は授業で、「君たちが主体となって、教師を活用してほしい」と、生徒に呼びかけていた。

「化学の授業は、生徒が自学では分からなかつ

純心女子高校の探究学習

今回取材した生徒が所属する国立大学進学希望者クラスの探究学習は、教育、福祉、環境などの領域別の班に分かれ、校内外の人への調査や生徒間での話し合いを通して、探究学習として取り組む課題を設定する。調べ学習で終わらない実践型の探究学習を目指しており、「障がい者と健常者の関係をアップデートする」を目標に、特別支援学校の生徒と協働でワークショップを実施した班もあった。

お話を伺った
生徒の皆さん小島麻由美さん
(2年生)木須さくらさん
(2年生)深堀純香さん
(3年生)橋本由布子さん
(3年生)白濱桃香さん
(3年生)

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

たところをグループで話し合い、それでも解決できなかったことを、先生に説明してもらおうという進め方でした。他の科目の授業も化学と同じ進め方ができるとは考えていませんでしたが、生徒の学習上の課題を授業の軸にするという点は参考にしようと思いました」（白濱さん）

3人は、数人の教師に、「先生と生徒の対話による新しい授業」を探究学習で取り組む課題として設定したことを説明し、授業で学習することや取り組むことを、教師と生徒が話し合っ

て決める試みを提案した。3人の話に教師たちは驚きながらも、生徒の学びの意欲を喚起し、自身の授業改善にも役立つのであればと理解を示した。早速3人は、各科目でどんな学びを望むのかを他の生徒からヒアリングし、その結果を整理して教師に伝えた。

だが、試みは失敗した。他の生徒からの声は、「話し合いの時間を増やしてほしい」「クイズ形式で要点を確認する時間を設けてほしい」といった、表面的な要望に終始したからだ。

「私たちの要望を踏まえた授業を、実際に先生方にしてもらいましたが、今までの授業との違いは感じられませんでした。生徒からは、『小テストの問題数が多すぎるので半分にしてほしい』という要望もありましたが、先生に相談したところ、『大学入試を見据えて問題数を設定しています』と言われてしまいました。先生方が考えた授業のねらいなどを理解しないまま、

表面的な要望を伝えることは対話ではないし、そうした要望でつくられた授業からは主体的な学びは生まれなと思います」（深堀さん）

新たな問題も浮かび上がった。それは、

授業に対する「責任」は誰にあるのかだ。新しい授業の形を提案し、実際に授業を行ってもらい、その成果や反省を次の授業に生かそうと考えた3人は、「複数回にわたって、私たちに授業の内容を組み立てさせてほしい」と、古典の担当教師に願ひ出た。それに対してその教師は、「あなたたちに対して私は責任があるから、何回も授業を任せることはできない」と答えた。

「その先生が言った『責任』という言葉が引っかかりました。授業で分かったこと、分からなかったことを生徒が教師に伝えて、次の授業のあり方を一緒に考えようとするならば、授業の責任は先生だけではなく、生徒にもあるのではないか……。主体的に学ぶ授業の責任の所在について考え込んでしまいました」（橋本さん）

22年度になって、「先生と生徒の対話による新しい授業」という課題に、2人の新2年生が参画した。木須さくらさんと小島麻由美さん

だ。木須さんは、先輩の取り組みを知り、授業の不満を教師だけにぶつけてきた自分を変えたいと考えた。そして、英語の担当教師に、自分がこの課題を選んだことを伝え、「よりよい授業のあり方を先生と話し合いたい」と申し出た。

「先生は私の申し出に驚いていましたが、怒

「もしも、あの時私が……」

生徒の探究は今も私の中にある

松尾まりこ先生（国語科）



「主体的な学びについて考えるために、自分たちで授業をつくりたい」という申し出を、私は「教師としての責任がある」と断りました。「あの時、一緒に授業をつくっていたらどうなったのだろう」と、今も考えます。生徒が考えた授業であっても、そこに教師である私がいれば、「責任」を果たせていたのかもしれませんが、3人の取り組みは、私にとっても忘れられないものになりました。

自分なりの答えを求める生徒に、教師としても影響を受けた

百岳真吾先生（地理歴史・公民科）



探究学習では、生徒は答えが1つではない課題に取り組みますが、彼女たちからは、何とかして自分なりの答えを見いだそうとする意気込みを感じました。彼女たちと授業のあり方について話し合い、そして彼女たちがもがきながら考えている姿を見て、私の中で、生徒が主体的に、より深く学ぶ授業を追究したいという気持ちが、今まで以上に高まりました。

りませんでした。それどころか、『授業のことを大切に考えてくれていたんだね。一緒に頑張ろう』とまで言ってくれました」

2人は、他の生徒にも呼びかけ、これまでの英語の授業のよいところ、改善してほしいところ、授業を通じて身につけたい力などを話し合った。だが、ここでも予想外の事態が起きた。

『今のままの授業でよいのに、なぜ、そんなことを話し合うの？』などと、私たちの取り組みに反対する意見が出てきたのです。自分がよいと思ったからといって、それが必ずしもほかの人にも受け入れられるとは限らないという現実の厳しさを痛感しました」（小島さん）

予想外の事態に、2人はショックを受けた。

「今の授業を変えたくないと言う人のことは気にせず、自分が信じることをやっていこうと思いましたが、次第にクラスの人たちとの溝が大きくなり、学校に行くのも嫌になってきてしまいました。でも、この課題に取り組んできた3人の先輩たちにも相談しながら考えるうちに、私たちの取り組みに反対する人にも、その人なりの理由があるのだと考えるようになったのです。他者の考えを自分と同じ考えに変えるのではなく、考えの違う個が協働して幸せになれるような場をつくる必要があるのだと、私の考えが変わりました」（木須さん）

教師や他の生徒との対話を通して、授業に対する見方は確かに深まってきたと感じる

5人だが、新しい授業がどのようなものなのかはまだ見えてない。

「先生方と話をする中で、先生は、『生徒にこうなってほしい』という姿から逆算して授業をしているけれど、私たちの現状と離れすぎてしまふことがあると感じました。自分の現状と距離のある授業だと、先生の話聞いて、板書を写すだけになってしまいます。でも、授業で自分が学ぶべきことをよく理解していたら、授業の受け方は変わらなと思うのです。生徒が自分の学習上の課題を理解し、先生と共有していくことで、誰にとってもちょうどよい距離感の授業になるのではないかと。だとしたら、そうした授業はどうすれば実現できるのか……。それを今考えています」（白濱さん）

一方、授業の責任や考えの違う個との協働など、当初想定していなかった問題は現在も解決されていない。

「確かに、新しい授業の形を考える過程で、次々と問題が浮かび上がってきましたが、それは調べ学習で終わらせず、分かったことを基に行動を起こしたからこそ生じたものですし、新たな問題にも向き合っているのは、自分たちが成長できているからだと思います。友人に探究学習のことを話したら、『先生と一緒に授業を変えるだなんて考えたこともなかった』と言われました。私も、自分たちがそんなことを考えられたことに驚いています」（橋本さん）

高校生は、周囲との衝突も成長の機会にできる

田中一彦先生（英語科）



木須さんと小島さんとは、授業についてというよりも、教育のあり方についてたくさん話をしました。

の生徒と衝突した経験を通じて、考えの異なる他者を受容できるようになったと語る2人の言葉を聞いて、高校生の成長はすごいなと感じました。私は自分の授業が講義型だとは思っていませんでしたが、生徒はそう思っていたことが分かりました。2人と話したことで、私も、もっと進化する必要があるのだと気がつきました。

●学校概要

設立 1935（昭和10）年
形態 全日制/普通科/女子校
生徒数 1学年（高校）約150人
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、筑波大、千葉大、埼玉大、横浜国立大、高知大、佐賀大、長崎大、宮崎大、北九州市立大、長崎県立大などに18人が合格。私立大は、津田塾大、東洋大、南山大、ノートルダム清心女子大、西南学院大、長崎純心大などに延べ96人が合格。

担当教師と考える「探究学習における主体性」



長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
3学年担任

樋本六秀 つちもと・むつひで

教師歴 26年。同校に赴任して 27年目。理科。



VIEW next編集部 統括責任者

柏木 崇 かしわぎ・たかし

自分事のテーマだから
粘り強く取り組めた

柏木 自分は主体的に授業に臨んでいるのだろうかと考え、教師と一緒に授業をつくっていかうと考え、実際に提案・実行した生徒の行動力にはとても驚かされました。私自身の高校時代を思い出すと、正直、先生に言われたことをこなすだけで、主体的に学ぶことができていなかった授業もありましたが、そのような授業を自分の力で変えていかうなどと考えたことは、一度もありませんでした。

樋本 5人の取り組みを知った人たちは、柏木さんのように驚きます。でも、生徒たちはいたって普通の高校生で、決して我を通すタイプではありません。

柏木 それなのに、先生に自分たちの考えを説明し、時にクラスメートと衝突しながら探究学習を進めていったのです。生徒が理想の授業を考える上でヒントになったのが、樋本先生の化学の授業だったのですが、探究学習に取り組む生徒からは、相談事も多かったのではないのでしょうか。

樋本 何度か相談に来たので、丁寧に話を聞き、「それはなぜ?」「あなたの気持ちは?」などと尋ねました。ただ、具体的なアドバイスは一切しませんでした。それでも、生徒たちの主体性が高く維持されていたのは、主体的に学ぶ授業の実現が、生徒たちにとって避けては通れない自分自身の課題だったからだだと思います。柏木さんは、「主体的に学べていなかった授業もあったけれど、授業を自分の手で変えようと思わなかった」と言いました。私も、高校時代は同じでした。その理由は、私たちは主体的に学んではいなかったけれども、

家庭学習などで補えば、学習内容を理解できたから、つまり、自分の困り事ではなかったからだと思うのです。高校生が授業をつくるという発想も、当時の自分にはありませんでした。今回の生徒にとっては、粘り強く取り組む価値があるテーマだったのでしょう。

日々の教師の問いかけを通して、
生徒は自分と向き合う

樋本 生徒が主体的に探究学習に取り組んだ理由は、もう1つあると思っています。それは、高校入学時から自分と向き合う時間がたくさんあったからかもしれません。3人の3年生には、私は担任として3年間かかわってきましたが、日々いろいろな問いを投げかけてきました。1年次の4月、どんな高校生活を送りたいか、生徒たちに聞いたところ、何人かの生徒が、「自分らしい高校生活」と答えました。私が「自分らしいって、どういうこと?」と尋ねると、生徒たちは思い思いの答えを口にしました。しかし、さらに問いを重ねると、生徒たちは「自分らしさ」が何なのか分からなくなりました。その時、生徒にとって「自分らしさ」は、3年間を通じた探究課題になったのだと思います。以降、私は学校生活の様々な場面で、「あなたはどうか考えているの?」「どうしたいの?」と尋ねました。柏木さんが取材に来た際も、生徒に「今日、ベネッセの柏木さんが来るけど、どうする?」と聞きました。

柏木 はい。樋本先生を訪ねると、いつも多くの生徒さんに囲まれ、様々なテーマで私が逆取材されます。

樋本 私が「どう思う?」「どうしたい?」と尋ねる度に、生徒は自分に向き合っていたのだと思います。「先生と生徒の対話による新しい授業」を課題として設定した生徒たちも、自分と向き合った末にこの課題にたどり着き、自分に取り組む価値を理解していたからこそ、粘り強く取り組めたのだと思います。探究学習を通して授業を変えたいという気持ち以上に、自分を変えたいという思いがあったのではないのでしょうか。

柏木 樋本先生から日々投げかけられる問いを通じて、生徒は自分と向き合ってきたからこそ、探究学習にも主体的に取り組めたのでしょうね。豊かな探究学習を実現する土壌は、豊かな学校の日常の中で育まれるものなのだと、改めて実感しました。

純心女子高校の樋本六秀先生と遠野高校の佐藤紘大先生が、生徒主体の探究学習をテーマに語り合いました。その模様を取材したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください(右記の2次元コードを読み込み、またはクリックしてアクセス)。VIEWnext ONLINE ▶





青森県教育庁

1人1課題に取り組み「あおもり創造学」で、地域課題を自分事として捉える

青森県は、持続可能な地域を創造する人材の育成に向け、生徒が地域課題に取り組む探究学習「あおもり創造学」を創設。生徒の主体性を引き出すために1人1課題の形とし、校内体制の確立を支援する研修も実施している。

教師の役割は、生徒が困った時に積極的に寄り添う「伴走」

高卒就職者の約4割が県外に就職し、県外大学等への進学率が約3割に上る青森県。県の人口減少が続く中、県の未来を担う人材を育成する施策として、青森県教育庁（以下、教育庁）は、2022年度、「総合的な探究の時間」等において、すべての生徒が取り組む「あおもり創造学」を創設した（図1）。それは、生徒が高校の所在地や自身の居住地について理解を深め、自分の関心に基づいて課題を設定し、地域資源を活用したり、地域人材と連携したりしながら

ら取り組む探究学習だ。

特徴は、1人1課題に取り組み、地域と連携する活動とした点だ。

生徒にとって身近な地域をテーマにすることで、生徒が課題を自分事として捉えやすくなり、日常生活において情報を集めたり、授業外でも活動したりと、調べ学習にとどまらない、主体的な探究学習が期待できると考えた。また、個人による活動とすれば、生徒一人ひとりの学習評価も担保できる。社会では、自分1人ではなく、関係者と連携し、議論しながら課題に取り組むことがほとんどだ。高校での探究学習において、他者と連携して課題に取り組む経験を

することができるよう、生徒が学校外で活動するための経費として予算も確保した。

生徒が課題を自分事として捉えられるようにするためには、教師の教育観の転換も重要だと、同事業担当の教育庁学校教育課高等学校指導グループの伴一聡指導主事は語る。

「生徒も教師も発表などの『まとめ・表現』に目を向けがちですが、探究学習では、情報を整理・分析し、時には他者と協働する中で、自分なりの納得解を出すプロセスこそが重要です。例えば、生徒が課題の設定に困っていたり、探究の途中で関心が変わったりし



学校教育課
高等学校指導グループ
指導主事
伴一聡
ばん・かずとし

●自治体概要

高校数 県立54校、私立17校
高校生徒数 約3万人

た際に、生徒が次のアクションを見いだせるように、生徒の関心事に関連する情報を収集する具体的な方法を提示するなど、教師の寄り添う姿勢が必要です。教員研修では、先進校の事例や質疑応答などを通じて、指導のノウハウに加え、生徒の探究に伴走し、生徒が困った時に積極的にかかわるといった探究学習における教師の役割も伝えていきます」

研修を年4回実施し、悩みの解決につながる情報を提供

各校が「あおもり創造学」を推進できるよう、22年度、教育庁は次の取り組みを行った。

◎各校の担当者対象の研修協議会
校内の推進体制を確立できるよ

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

図1 「あおり創造学」事業概要

●「あおり創造学」とは

高校生活の中で、地域資源や人材を活用して、総合的な探究の時間等において、高校の所在地及び自身の居住地域等について理解を深める学習。地域と協力しながら生徒一人ひとりの「ふるさとあおり」への愛着や誇り、夢を抱き、未来に向かって挑戦する意欲の醸成に取り組み、その成果を小・中学校及び地域に発信する。

●主な取り組み

- ・地域や外部と連携するためのバス使用料等の予算を確保し、2022・23年度は推進校20校、2023・24年度は推進校以外に配分。
- ・各校に「あおり創造学総括担当教員」を配置。研修を年4回実施。
- ・全校の実践を一元で発信するウェブサイト（P.16 図3）を開発。
- ・県で成果発表会を実施。各校は、成果をまとめた動画を製作・配信。

青森県では、人材を「人の財^{たから}」と捉え、「人財」と表記している。
※青森県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。

図2 「あおり創造学及び総合的な探究の時間」教員研修協議会 概要

実施頻度・時期 年4回（5月、7月、9月、11月）

実施時間 各回とも10時00分～15時30分

参加者 各校のあおり創造学総括担当教員1人（複数参加可）

各回の内容 各回とも、「あおり創造学」の取り組みに関する質疑応答と、県内6地域のグループ別の情報交換・分科会も実施

回	テーマ	主な内容
第1回	校内体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・「あおり創造学」の事業説明・質疑応答 ・地域課題に関する県の施策、及び高校関係事業の説明（発表者：知事部局と教育庁他課の担当者） ・県内先進校の実践発表（テーマ：高校生が考える人口減少対策プログラム）
第2回	他機関とのネットワークづくり	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教員の講演・質疑応答（テーマ：外部機関と連携した探究学習、ネットワークづくり） ・県内10大学・短大による地域連携・高大接続に関する情報提供
第3回	ICTの活用、キャリア教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・地域課題に関する県の施策、及び高校関係事業の説明（発表者：知事部局と教育庁他課の担当者） ・岩手県の先進校の教師による講演（テーマ：担当者が1人で悩まずに学校全体で取り組む探究学習の体制づくり）
第4回	効果的な情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ・大学教員の講演・質疑応答（テーマ：探究学習における地域課題の捉え方、プロジェクト形成のコツ）

※青森県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。



写真 教員研修協議会では毎回、県内6地域ごとに担当教員が集まる分科会も実施。地域特有の状況が分かる教師同士で活発な情報交換が行われた。

う、各校に「あおり創造学総括担当教員」（以下、担当教員）を置き、担当教員対象の教員研修協議会を4回実施した（図2）。県の地域課題に関する施策や、高校が利用できる支援事業の説明などを行い、生徒が設定する課題や経費の確保の方法を、担当教員がイメージできるようにした。また、担当教員に研修内容を自校の教師に報告・共有するように伝え、各校に

おいて研修内容を共有する場を設けられるよう、各校に依頼した。担当教員に好評だったのは、県内外の探究学習の先進校の実践発表と、大学教員による思考ツールの活用実践に関する講演だった。「先進校の先生には、生徒に伴走するとは具体的にどうすることか、校内体制をどのように築いたかなどについて話していただきました。思考ツールの活用方法では、

大学の先生に、青森県の課題を題材にして、実際に思考ツールを活用しながら説明していただきました。課題設定の際に思考ツールをどう使えば、情報の整理や分析ができるようになるのかがイメージできたといった声が担当教員から聞かれました」

教員研修協議会では、県内6地域ごとの分科会も行った（写真）。地域内の普通科や専門学科、定時

制、通信制の教師が、地域の課題や生徒が設定した課題を共有し、それらに取り組み際に教師ができる支援について助言し合った。

「専門学科は課題研究での指導経験が豊富ですから、普通科の教師にとって参考になる点が多々あります。分科会で教師同士が関係を築き、普段から情報交換や相談をし合うなど、よい実践を横展開しやすくなりました」

ウェブсайтや成果発表会で 学校内外に実践をアピール

◎ウェブサイトで成果を一元発信

教育庁は、全校の実践と成果を発信する「あおもり創造学」のウェブサイトを開設した(図3)。各校の魅力の訴求や外部の連携先の成果報告、保護者への探究学習の周知など、様々な効果をねらっている。特に、各校がそれぞれの実践を共有する中で協働研究に発展することや、小・中学生が高校での探究学習の情報を得て、現在の学びが高校での学びにどうつながるかをイメージして進路選択に役立てることを期待している。

◎県主催の成果発表会の実施

23年1月、「あおもり創造学」の成果発表会を、対面とオンラインの併用で開催した。参加した26校の生徒は堂々と発表し、聴衆の生徒も積極的に質問した。「あおもり創造学」の取り組みの改善テーマにした分科会も行い、その内容は会場全体で共有した。

伴指導主事は、同事業の成果を象徴する発表に、定時制高校の生徒が取り組んだ「地域連携と防災意識の向上」を挙げた。その高校の生徒たちは、学校が津波による浸水区域に位置することから、町民と防災について話し合い、一緒に町を歩いて避難経路を確認するとともに、防災訓練も行った。その実践は、22年10月に新潟県で開催された「世界津波の日 高校生サミット」でも発表された。

図3 「あおもり創造学」のウェブサイト



各校の「あおもり創造学」に関する最新情報をまとめて紹介

各校が取り組む主要な課題をウェブサイトに紹介している

下記 URL、または「あおもり創造学」で検索し、アクセスしてください。
<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-gakyo/aomorisouzougaku.html>
※青森県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。

「身近なことに関する課題意識を発端に情報を集め、分析し、行動に移して、その成果を世界に発信したその生徒は、世界に目を向けるようになっていました。本事業の意義を強く感じた事例です」

カリ・マネを推進し、 持続可能な探究学習の実現を

現在までの成果を、伴指導主事は次のように語る。

「教員研修協議会では、回を重ねる度に、教師は自校の課題を開示して指導主事や他校の先生方に助言を求めるようになってきました。意欲的になっていきました。実施1年目としては、十分な手応えがあります。一方で、教員研修協議会の参加者が毎回異なるなど、校内体制が確立されていない様子がかがえた学校には、こまめに連絡し、重点的な支援を心がけました」

今後の課題は、「総合的な探究の時間」を軸にしたカリキュラム・マネジメントの実現を支援することだ。生徒が主体的に探究学習に取り組み、活動は「総合的な探

究の時間」の枠に収まらなくなり、各教科の学習や学校行事、外部との連携が一層重要になる。すなわち、各校がカリキュラム・マネジメントの視点で教育活動を見直すことが求められ、教師の負担が軽減されて、事業終了後も持続可能な探究学習になると考えている。

小・中学校と高校の探究学習の連続性も課題に挙げる。多くの小・中学校では「総合的な学習の時間」で地域学習を行っており、個人差はあれど、生徒は高校入学時に地域への関心を持っている。市町村教育委員会との連携やキャリア・パスポートの活用によって生徒の実態をつかんだ上で活動ができる仕組みづくりも検討していく。

「地域の課題に取り組む経験は、生徒の社会貢献意識を高め、青森県のみならず、日本の発展に寄与するでしょう。何より、地に足のついた探究学習に取り組むことで、学びが深まり、自身のあり方・生き方もより明確になるはずだ。現場の教師や生徒が一層主体的に活動できるよう、これから支援を続けていきます」



福井県教育庁

生徒が「**念い**」を社会に発信する、 全国規模の「**プレゼン甲子園**」を開催

福井県は、学校間で連携して探究学習を行う仕組みづくりや、中学校での探究学習を評価する高校入試の導入、そして生徒が「念い」を伝える「全国高校生プレゼン甲子園」の開催などで、生徒主体の探究学習を支援している。

校内体制の構築と、 各校の実践の横展開を支援

福井県教育庁(以下、教育庁)は、県立高校の特色化の1つとして探究学習を掲げ、2022年度までに県立高校8校に探究系学科を設置するとともに、全校の探究学習の推進を支援する施策を講じている。教育庁高校教育課の渡邊本樹参事は、そのねらいをこう語る。

「本県では4校がSSH(＊)に指定されており、各校の生徒は、探究学習に意欲的に取り組み、全国規模の発表会に出席して成果も上げています。そうした生徒を支援している各校のノウハウを県内

の全校に広め、県全体で探究学習を推進する体制を整えました」

22年度に講じた主な施策は、次の通りだ(P.18図1)。

◎各校に探究学習担当者を配置

校内の探究学習の推進を中心的に担う校務分掌を設置し、探究学習担当者として、探究リーダー・ICT活用リーダー各1人、教科学習リーダー5教科各1人を配置するよう各校に依頼した。

◎探究学習コーディネーターの巡回

退職教員2人を「探究学習コーディネーター」として配置。各校を訪問し、校内の探究学習を推進する体制の確立や、各校の実践の紹介など、探究学習の推進を支援

している。各校の探究学習担当者をつなげる役割も担う。

◎教員研修を年3回実施

各校の探究学習担当者を対象とした教員研修を、22年度は3回実施。例えば、23年1月に行った研修には、全校の探究学習担当者が参加し、次年度の探究学習の年間計画を考える機会とした。

◎全校の探究学習担当者が交流する場をオンライン上に設置

全校の探究学習担当者がオンライン上で交流する場を設置した。教員研修で各校の担当者同士の交流が深まるにつれ、交流の場の書き込みが増えていき、22年度末には、次年度の「総合的な探究の時



高校教育課
副部長(高校教育)
山崎良成
やまざき・よしなり



高校教育課
参事(大学進学サポート)
西東一彦
さいとう・かずひこ



高校教育課
参事(授業力向上)
渡邊本樹
わたなべ・もとぎ



高校教育課
指導主事
家根谷直登
やねや・なおと

●自治体概要

高校数 県立25校、私立7校
高校生徒数 約2万人

間」の年間計画についてアドバイスし合うやり取りも見られた。

学校を超えた連携が活発化。 互いに刺激し合う生徒たち

以上の施策によって、学校間の連携が活発化している。例えば、県立高校5校が校則や校内ルール

* 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」の略。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

図1 探究学習の推進に関する主な施策（2022年度）

- 校内体制の整備
各校に、探究学習を推進する校務分掌を設置し、探究学習担当者として、探究リーダー1人、ICT活用リーダー1人、教科学習リーダー5教科各1人を配置。
- 探究学習コーディネーターが各校を巡回
探究学習コーディネーター2人（退職教員）を配置し、各校を巡回して支援。ほかに、大学教員の探究学習アドバイザーも配置。
- 教員研修を年3回実施
探究学習担当者を対象にした教員研修を年3回実施。

実施月	テーマ	主な内容
8月	観点別学習状況の評価	<ul style="list-style-type: none"> 各校の探究リーダーが4グループに分かれ、校内体制づくりなどを議論 県内の先進校2校の実践発表 仁愛大学の西出和彦教授の講演
1月	今年度の振り返り、次年度の計画	<ul style="list-style-type: none"> 國學院大学の田村学教授の講演（探究学習における教師の役割と実践など） 各校の探究リーダー、ICT活用リーダー、教科学習リーダーごとの分科会で情報共有
3月	生徒の変容、評価、校内体制	<ul style="list-style-type: none"> 各校の探究リーダーが3人ずつのグループに分かれて情報共有 研修内容についてオンラインでの事前説明会を実施 事前事後アンケートを実施し、結果を共有

- 高校間の情報共有を支援
Google クラウドルームに、探究学習担当者の交流の場を設置。年度当初には、すべての学校が、生徒の探究学習のテーマ一覧を、個人情報除外した形で共有した。
- 高校入試の改革
探究系学科を設置する高校が、探究系学科の入学者選抜で、中学校までの探究学習を評価する方法を独自に設定した特色選抜を実施（下表は一例）。

テーマ	特色選抜の内容
こし高志高校	<ul style="list-style-type: none"> 事前課題 ①自分が関心を持つ内容の新聞記事等を選び、自分の考えを探究的観点でまとめる ②中学校での探究学習または英語に関する取り組みをまとめる 口頭試問、面接
たけふ武生高校	<ul style="list-style-type: none"> 試験会場で出された課題について、各自内容を検討し、ポスターなどを作成してプレゼンテーションを行う 適性検査

※福井県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。

をテーマにした合同ワークショップを開催し、各校の実践を踏まえ、よりよい校則や校内ルールのあり方を議論した。また、課題研究のアドバイザーを務める大学教員の仲介で、県立高校2校の研究グループが学習会を開き、協働して学びを進めている。2校ともに「地域の地震」を研究テーマにしているが、それぞれ「地震の予知」、「活断層」と、題材が異なるため、互いに違う視点の意見を得る機会

となり、より探究が深まっている。「探究学習の成果を学校外で発信し、他者から意見を聞くことは、取り組みを客観視して改善したり、新たな発想が生まれたり、次の一歩につながります。その過程において、課題をますます自分事として捉えられるようになり、それが主体的な探究学習につながると考えています」（渡邊参事）

また、探究学習における中高連携を図ろうと、探究系学科を設置

する高校が、高校入試において、中学校で取り組んだ探究学習を評価する特色選抜を実施している（図1）。高校教育課の山崎良成副部長は、その意図をこう語る。

「中学校で取り組んだ探究学習の成果を、高校での探究学習に結びつけることで、自分の興味をさらに掘り下げてほしいという思いがあります。また、高校が探究学習を重視している姿勢を、高校入試において明確に打ち出せば、全

中学校に、自分のあり方・生き方を追究するような探究学習が広まると考えました。探究学習は自分にかかわる楽しい学びだと中学生が感じられるようになることで、県全体で生徒主体の探究学習が実現することを期待しています」

自分の「念い」を持つまでの過程こそが、主体的な探究に

生徒が探究学習の成果を主体的に発信する場として、教育庁は「全国高校生プレゼン甲子園」を開催している。「テーマについて深く考察した上で、論理的思考力、表現力、創造力を発揮して、自分の考えや念いを伝える総合的なプレゼンテーション能力の向上を図る」ことを目的とし、一般社団法人プレゼンテーション協会の代表理事が同県出身であることが縁で始まった。22年度は34都道府県から441チームが参加した全国規模の大会で、23年度に第3回を迎える（図2）。高校教育課の西東一彦参事は、「念い」とした意図を次のように語る。

図2 2023年度「第3回 全国高校生プレゼン甲子園」実施要項

●**テーマ（予選・決勝共通）**

「Well-being（ウェルビーイング）と未来社会—幸せとは何か—」
個人の幸せの追求にとどまらず、広く、地域社会、若しくは日本や世界全体の Well-being を実現するための具体的なアクションを提案する

●**応募資格** 高校生1チーム3人まで（個人でも可）

●**審査方法・日程**

- 1次審査：予選動画提出 5月26日（金）～6月7日（水）
- 2次審査：ブロック選抜（オンライン） 7月8日（土）～9日（日）
開催県を含む全国7地区に分け、予選動画についてオンラインによる質疑応答を実施
- 決勝大会：対面審査（会場・福井県） 8月19日（土）
各ブロックを勝ち抜いた10チームが、テーマに沿ったプレゼンと質疑応答を実施（プレゼン時間5分間）

※最優秀賞、優秀賞のほか、ブロック賞や学校奨励賞なども創設

●**過去の予選応募数**

- 第1回 29 都道府県 85校 409チーム（県内288、県外121）
- 第2回 34 都道府県 107校 441チーム（県内300、県外141）

応募方法など、詳細は公式ウェブサイトをご確認ください。
下記 URL、または右記2次元コードでアクセスできます。

https://presen.or.jp/presen_koshien/

全国高校生プレゼン甲子園 **検索**



※福井県教育庁の提供資料を基に編集部で作成。



写真 プレゼン甲子園の決勝大会では、会場を巻き込むパフォーマンスを交えてプレゼンテーションをするチームもあった。決勝大会の動画は、公式ウェブサイトで公開中。

「代表理事の言葉を借りて言え

ば、相手の心に響くプレゼンは、

確固たる『信念』があってこそで

きるものです。その信念を持つた

めには、どんな課題を設定し、ど

のような情報を収集して、どう分

析するか。そうしたプレゼンに至

るまでの過程が重要であり、それ

がまさに主体的な探究になると考

えています。決勝大会では、プレ

ゼン5分間に対して、質疑応答を

10分間とし、出場者の念いを丁寧

に見ています」

いくつかの応募校では、自校の

探究学習のねらいに応じてプレゼ

ン甲子園を年間計画に組み込んで

いる。1年次に組み込んでいる学

校は、探究サイクルを回す練習の

機会の1つとしている。2・3年

次に組み込んでいる学校は、1年

間の探究学習の成果を発表する場

として応募させたり、学年で代表

者を決め、取材や調査を追加して

プレゼン内容に磨きをかけた上で

大会に臨んだりしている。

**大会での客観的な評価が
次の一歩につながる**

22年度の決勝大会では、全国を

勝ち抜いた生徒の熱いプレゼンが

繰り広げられた（写真）。「どのチー

ムも全身を使って伝えようとする

姿に、私も熱くなりました」、「持

続可能な未来について真剣に考

え、行動している仲間に出会えて

よかったです」といった声が出場

者から聞かれ、互いのプレゼンに

感想を述べ合う光景が見られた。

自分が興味を持って主体的に突

き詰めた探究学習は、生徒の様々

な自己実現につながっている。決

勝大会でのプレゼンが協賛企業

の目に留まり、米粉ストローの商

品化が検討されている。ある生徒

は、決勝大会の経験から、地元へ

の貢献の思いを強くし、福井大学

国際地域学部総合型選抜で探究

学習の実績をアピールして合格し

た。プレゼン甲子園事務局担当の

家根谷直登指導主事は、こう語る。

「向き合う問いの正解が1つで

はなく、成果も実感しづらいのが

探究学習です。本大会が、自分の思

いが観客に伝わった、あるいは伝

わらなかつたと、生徒が実感でき

る場となるよう、運営しています」

教育庁は、今後も様々な形で探

究学習の推進を支援していく。

「探究学習は、多くの人の幸せ

につながる学びであり、未来に向

かって期待感を持って進める学び

です。生徒も教師も、探究学習を

自分事にするとともに、社会をよ

りよくしたいという思いを持って

主体的に取り組んでいけるような

機会を、これからも提供したいと

考えています」（西東参事）

探究のプロセスを見通しつつ、論理的・批判的に思考することができ「対話型論証モデル」で、探究の自走を図る

多くの高校の探究学習の支援・助言に携わる京都大学の松下佳代教授は、生徒が探究学習を自律的に進めるツールの1つとして、「対話型論証モデル」を提唱している。そのモデルを使って探究学習を進める大阪府・私立高槻中学校・高校では、生徒が自分で筋道を立てて考えを深める様子が見られるようになり、教師は個別支援がしやすくなったという。

同モデルは、生徒主体の探究学習をどう支えているのか。松下教授と、高槻中学校・高校の教師、ティーチング・アシスタントに話を聞いた。

論理的思考力を働かせながら問いを結論に導く

——「対話型論証」について教えてください。

松下 対話型論証とは、「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠を持って主張を組み立て、結論を導く活動」のことです。それを図式化したのが「対話型論証モデル」で、ツール・ミン・モデルなどを参考に作成しました（*1）。本モデルは、①問題、②主張、③事実・データ、④論拠、⑤対立意見、⑥反駁、⑦結論の7つの要素から成ります（図1）。まず大切なのは、①問題↓②主張↓⑦結

論の縦の軸です（図1緑枠）。調べて分かったことがたくさんあっても、①問題が明確でないと②主張に結びつけられず、⑦結論として何が言えるかが曖昧になってしまふからです。

一方、横の軸も大切です。左側の部分は、一般に「三角ロジック」と呼ばれるものです（図1赤枠）。③事実・データを、④論拠によって解釈し、②主張を導きます。それを使って物事を捉えると、同じ事実・データでも、異なる論拠・理由づけをすれば、異なる主張になることもあるのが分かります。例えば、ルネサンスの名画「最後の晚餐」を基に、「ルネサンスは中

世か近世か」を問いにした時、題材の宗教絵画に着目すると「中世」と言えますが、遠近法を用いている点は「近世」の特徴です（図2）。その2つの主張を合わせれば、ルネサンスが中世と近世の過渡期にあることが分かるわけです。そのように、②主張、③事実・データ、④論拠を区別することで物事を論理的・批判的に捉えられるのが、三角ロジックのよさです。⑤対立意見も三角ロジックで構造化して捉えることで、相手の主張がよりよく理解でき、その上で、相手の主張のどこに問題があるかという⑥反駁が行いやすくなるでしょう。



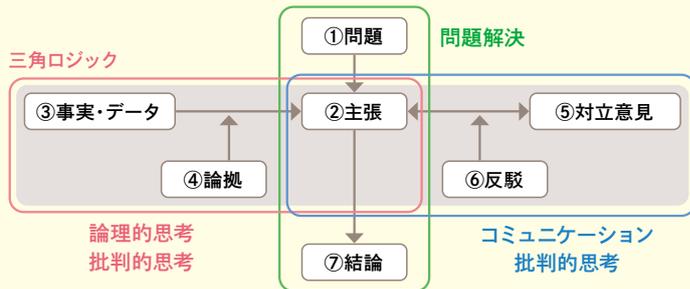
京都大学大学院教育学研究科 教授
松下佳代 まつした・かよ

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学修認定退学。博士（教育学）。京都大学教育学部助手、同高等教育研究開発推進センター教授等を経て、2022年10月から現職。専門は、教育方法学、大学教育学。特に、能力、学習、評価をテーマに研究と実践支援を行う。著書に、『対話型論証による学びのデザイン 学校で身につけてほしいたった一つのこと』（勁草書房）、『対話型論証ですめる探究ワーク』共著、『勁草書房』、『ティーブ・アクティブラーニング』（勁草書房）など。

*プロフィールは、2023年3月時点のものです。

図1 「対話型論証モデル」の基本要素

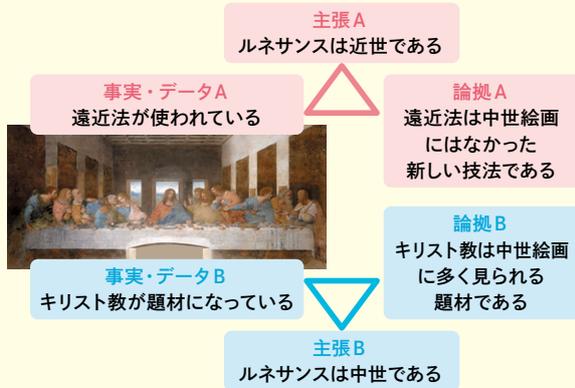
- ①問題 ある対象や状況についての問題意識やその背景、そこから設定した問題(課題や問い)。
- ②主張 問題に対する特定の考え。事実・データと論拠によって支持され、対立意見への反駁によって強化される。
- ③事実・データ 主張を支える具体的な材料。
- ④論拠 事実・データを主張に結びつける土台となる理由。
- ⑤対立意見 設定した問題に対する自分とは対立する(少なくとも異なる)意見。対立意見にも、それを支える事実・データや論拠がある。
- ⑥反駁 対立意見に対し、自分の主張を擁護するための反論。
- ⑦結論 複数の主張を統合して得られる結論。設定した問題に対する答え。



※松下教授の提供資料を基に編集部で作成。

図2 「三角ロジック」の具体例

問い ルネサンスは中世か近世か



※松下教授の提供資料を基に編集部で作成。

探究のプロセスと考え方をワークシートに示す

対話型論証モデルを使うと、問題から結論までを論理的に考えやすくなるのが分かりました。探究学習には、具体的にどう活用することができるのでしょうか。

松下 対話型論証モデルを、学習指導要領の解説(※2)に示され

ている「探究における生徒の学習の姿」にあてはめると、①は「課題の設定」、②③⑥は「情報の収集」と「整理・分析」、⑦は「まとめ・表現」になります。そうした探究のプロセスとともに、どのような思考を働かせればよいかを示されているので、自分で探究学習を進められるようになっていきます。

前田 本校では、中学3年次から

本格的に探究学習に取り組みますが、生徒はまず、対話型論証モデルを使って探究のプロセスや考え方を学びます。初めて探究学習に取り組む生徒も、次にすればよいことがイメージしやすいため、自ら考えて進めています。最初は、「事実・データ」と「論拠・理由づけ」の違いなどが分かりにくいようですが、生徒同士で「理由づけは正しいか」「客観性はあるか」などと対話を重ねるうちに、その違いなどを理解し、自分で探究を

田中孝平 たなか こうへい
同志社大学社会学部卒業。京都大学大学院教育学研究科修士課程修了。専門は、大学教育学。特に、高校の探究学習を通じた高大接続について、実践的・実証的に研究を行う。



前田秀樹 まえだ ひでき
●学校概要
設立 1940(昭和15)年
形態 全日制/普通科/共学
生徒数 1学年約270人
2022年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京大、京都大、大阪大、神戸大などに164人が合格。私立大は同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ511人が合格。

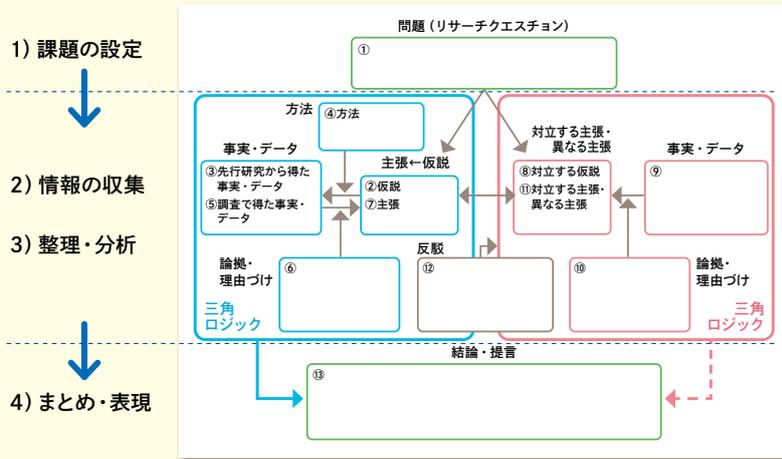


大阪府・私立高槻中学校・高校 教頭(※3)
教職歴28年。同校に赴任して24年目。

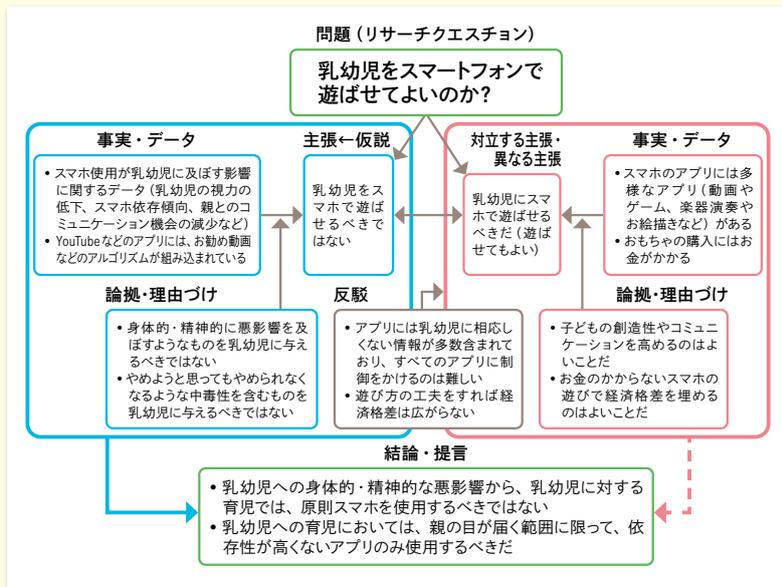
* 1 トゥールミン, S. (2011)『議論の技法—トゥールミンモデルの原点—』(戸田山和久・福澤一吉訳) 東京図書。
* 2 文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編」。
* 3 2023年4月から兵庫県・私立関西学院高等部に勤務。

図3 高槻中学校・高校が活用するワークシートと、生徒の記入例

●対話型論証モデルのワークシート



●ワークシートの生徒の記入例



※高槻中学校・高校の提供資料を基に編集部で作成。

深めていけるようになります。
田中 高槻中学校・高校では、すべての生徒がクラウド上に保存されている対話型論証モデルのワークシート(図3)に問題や主張、調査の手続きや項目などを記入します。それぞれの構成要素が記入できれば、自分の達成状況を

「Classi」(*3)のポートフォリオにアップしています。そのため、各生徒がどんな問いを立て、何を調べているか、どこまで探究が進んでいるかが、即座に分かります。「この生徒にはこんな声をかけよう」、「この生徒は見守っていよう」などと、生徒個々に合った支援が

できていると思います。
前田 探究学習は、テーマや進度が生徒それぞれで異なり、一人ひとりに適切な支援や評価を行うところに難しさがあります。ワークシートをICTで共有することで、生徒の状況をタイムリーに把握し、個に応じた支援や形成的評

価がしやすくなりました。

生徒自身が熱中できる「問い」が、主体性を発揮する原動力に

——モデルに縛られてしまい、かえって生徒の主体性が発揮されにくくはならないでしょうか。

松下 対話型論証モデルを使えば、探究学習のプロセスを目に見える形にしやすいため、確かに探究学習が形式的になる恐れはあります。ただ、前田先生がおっしゃったように、初めは教師の指示通りにワークシートを埋めたとしても、探究のサイクルを回すにつれて、本モデルが示す考え方を理解することができるようになります。

高槻中学校・高校では、先生方が本モデルのねらいを理解し、生徒の実態に応じて作り変えてられました。図3は、自分の主張と対立意見のそれぞれの事実・データや論拠を対比させるため、対立する主張の側の三角ロジックも書き表したものです。仮説に関する事実・データを集める「方法」を示す欄も設け、探究の手順がより

*3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図4 「対話型論証モデル」のウェブサイト



対話型論証モデルを用いた探究学習の進め方を解説しているウェブサイト。ワークシートなどのダウンロードが可能だ。
<https://www.d-argument.net>

考えやすくなっています。
田中 私が生徒を支援する中で重要だと感じたのが、「問い」の立て方です。問いへのこだわりが薄く、結論を出しやすい問題を設定していた生徒が一定数いました。振り返ったところ、自分が本当に探究したい問題を設定できなかったために、生徒は主体的に取り組みなかつたのではないかと気づきました。生徒は、「探究学習は高尚な学び」と捉えていて、自分の内面から湧き出る疑問や違和感が探究の問いになると思っていないのかもしれない。例えば、地球

温暖化など、よくある課題を探究しようと思っても、その課題の何が自分にとって疑問なのか、どこに違和感を覚えるのかがはっきりしなければ、その課題は自分事にならず、主体的に取り組むことができないのだと思います。
松下 高校生の探究学習は、自分は何に関心があるのか、自分の適性は何かを見つめることもねらいの1つです。身近な課題や小さな疑問を探究し、それによって気づきが得られるだけでも十分に意味があるはず。結論が出なかつたとしても、試行錯誤のプロセスを振り返り、どこで、なぜつまづいたのか、うまくいったポイントは何かを考える経験が、生徒の成長につながります。

前田 私も、探究学習はゴールだけを見ないことが大切だと思っています。生徒が主体的に探究学習に取り組むようにするには、自分が本当に探究したい問いを見つけ、自分なりの方法で答えにたど

り着くプロセスが大切です。自分が面白いと思うことを追究することが学びになるという意識を、教師と生徒の双方が持つことが必要なのかもしれません。

松下 小学校や中学校でも、対話型論証モデルを活用して、子ども主体で探究学習を進めている学校があります。簡単な問いから始めて実践を重ねれば、三角ロジックも理解することができず。ウェブサイトでも公開していますので、ご活用いただければと思います(図4)。

**探究学習を核にしたカリマネで、
 教科学習との連携を図る**

生徒主体の探究学習を実現する上で、何が必要であるとお考えですか。

前田 探究学習では、教師は生徒に具体的な助言をする必要はないと考えています。「事実をこう解釈しているけれど、本当にそう言えるのかな?」「ほかにどんなデータがあればよいと思う?」などという問いかけ、生徒が「これを調べ

よう」「こういう人に話を聞こう」などと、自分で考えて行動してこそ、探究は深まっていくからです。探究学習は生徒主体で進める学びであり、教師は生徒の伴走に徹するという、教師の教育観の転換が何よりも重要だと考えています。

田中 先生方がそうした教育観を持てるようにするためにも、自校の学校教育目標を踏まえて、探究学習を教育課程にどう位置づけるかを考える、カリキュラム・マネジメントが求められます。

松下 新学習指導要領の新しい科目名を見ても分かる通り、教科学習においても「論理」や「探究」が重視されています。探究学習は、「総合的な探究の時間」のみで行うものではなく、「総合的な探究の時間」と教科学習との連携や、教科間を横断して取り組むことが求められています。各教科の授業でも問いを重視し、「よい問いとは何か」を生徒が感じられるような授業を学校全体で行うことができれば、より深い探究ができ、生徒の資質・能力も高まっていくのではないのでしょうか。

VIEWnextは 次号、創刊400号を迎えます!

本誌の前身である『進研ニュース』が産声を上げたのは、1974年8月15日。今日に至るまでの48年間、『VIEW21』、『VIEW next』と名称を変更しながらも、常に先生方とともに、これからの学校教育を考える情報誌として研鑽を続けてまいりました。そして次号、弊誌は創刊400号を迎えます。それを機に、さらに読みやすく、読み応えのある誌面へとリニューアルをいたします。

VIEWnext

これまでの歩み



1974年

創刊。進学指導にあたる高校教師の支援を目的に、4ページのタブロイド版でのスタート。



1983年

創刊10年を機に、タブロイドからB5判の情報誌に刷新。90年代に入ると、「大学入試情報中心」から「進路指導情報中心」へ編集方針を転換。



1995年

誌名を『進研ニュース VIEW21』に変更。「21世紀を見つめ、今後の社会をたくましく生きていくためには、どのような進路指導が望まれるのか」を、現場の先生とともに考えていく情報誌へ。



1998年

「生徒と教師のコミュニケーション」をコンセプトにした表紙に変更。



2004年

B5判からA4判へと判型を変更。図版などを大きくし、見やすい誌面に。



2006年

この年の10月号で創刊300号を迎えた。特集のテーマは、「高校教育の『不易と流行』」。



2017年

全ページをカラー化し、誌面デザインを一新。高校教育が転換点を迎える中、これからの教育のあり方のヒントとなるような情報を提供していく決意を新たにす。



2021年

誌名を『VIEW next』に変更。21世紀のその先も、学校や先生方の今に寄り添い続け、ともに学校教育の未来を描けるような学校教育のパートナーを目指すという決意を込める。

2023年6月

創刊400号を機に、さらなる読みやすさを追求するとともに、より“役立ち”、“面白く”、“勇気づけられる”誌面へと大リニューアル予定。

**創刊400号となる『VIEW next』高校版6月号は、6月20日発刊予定です。
どうぞご期待ください!**